

# 津久井城跡馬込地区

(相模原市城山町No.8遺跡)

調査期間	20060201～20071015
所在地	相模原市城山町小倉字馬込
時代	旧石器 縄文 中・近世

更新日:20090714

## 概要

津久井城跡(馬込地区)の発掘調査は、平成18年2月1日～平成19年10月15日まで実施され、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古代～近世にいたるさまざまな遺構・遺物が発見されました。そして現在、平成22年2月の報告書刊行を目指して、野庭出土品整理室にて整理作業を継続しています。

旧石器時代の整理作業では、遺跡から出土したおよそ1500点の石器をその石材毎に分類し、接合作業を行いました。その結果、半数以上の石器が接合され、中にはほとんどの石器が接合し、打ち割られる前のほぼ完全な礫(れき)にまで復元できた資料もありました。その中で、ホルンフェルスと呼ばれる石材では、打製石斧(だせいせきふ)に複数の剥片(はくへん)類が接合し、斧を製作する過程を復元することが出来ました。その他、様々な石材で、接合が認められ、石器製作技術を解明する上で、貴重な資料が多数得られました。およそ8割の石器は、B4層とよばれるおよそ3万年以前と考えられる地層から発見されました。この時期に特徴的な局部磨製石斧(きょくぶませいせきふ)や台形様石器(だいけいようせっき)の他、多数の剥片がまとまって出土しており、石器の製作址であった可能性が考えられます。石器には、地元の河床で採取可能な硬質細粒凝灰岩(こうしつさ



▲B4層出土石器



▲A区 茶臼(中世～近世)

いりゅうぎょうかいがん)やホルンフェルスと呼ばれる石材が多用されていますが、黒曜石(こくようせき)や水晶(すいしょう)など地元では採取できない石材も存在しました。黒曜石は、51点が出土し、その産地同定分析を実施したところ、およそ半数は神津島(こうづしま)産、残りの半数は信州産であるという推定結果が出ました。およそ3万年も前に、黒曜石が遠く海を越えて津久井の地まで運ばれていたことが解明されました。

大量に出土した中世・戦国期から江戸時代にかけての陶磁器類に混じって茶道の道具と考えられる、茶臼や茶入れなどが出土しました。茶は平安時代に中国より伝来し、当初は薬剤として用いられていましたが、中世室町時代には茶道文化が生まれ、戦国期には武士がこぞって取り入れました。戦国期～江戸の初め頃に茶をたしなんでいた証拠などから、この時期に武士が存在した可能性が高いと思われます。

このようなお茶関係の遺物のほかに、方形石組(ほうけい いしぐみ)遺構からは江戸時代中期頃の日用雑器も多く出土しました。この中には現代でも人気の高い蛸唐草文(たこからくさもん)や花唐草文が施された器(うつわ)や、「くらわんか手」と呼ばれる器もあり、当時の生活ぶりを垣間見ることのできる遺物です。



▲茶入れ(17世紀後半)



▲方形石組遺構出土の磁器